
ファッキン！クリ〇〇ス！

着地した鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファツキン！クリ〇〇ス！

【Nコード】

N6828P

【作者名】

着地した鶏

【あらすじ】

イブの夜、彼女は何を探すのか。探し物はなんですか？ 題名に比べたら比較的まともな恋愛小説だと作者が保証する。

「ひいちゃん、お願い！ 24日のシフト変わって！」

そんなことを言つて、先輩は私に頭を下げた。

あまりに急なことだったので私は陳列棚に並べようとしていた新発売のパンを危うく落つことすところだった。

「ど、どうしたんですか。急に」

「いやね、あのね24日にちよつとした予定が入っちゃって」

目の前にいる先輩の目は明らかに泳いでいる。これは何か隠し事をしているな、と私は少し勘ぐっていたが24日と言うのですぐにピンと来た。

「先輩、デートですか？」

私がそう告げた次の瞬間、先輩の顔はみるみる赤く染まっていった。まるで湯気がボンツと吹き出してもおかしくないくらいだ。

「あ、そ、そ、そんなんじゃないわ、わよ！ べ、別にい、イヴだからってそ、そんなんじゃないんだから」

「顔、真っ赤ですよ」

「え！？ ウソ！」

先輩はその真っ赤な顔を隠そうと必死に手で覆おうとする。

そんな可愛い仕草をする先輩を前に私はふうと息をつき、言葉を紡ぐ。

「いいですよ、24日」

「へ？」

「シフト、変わりますよ。24日は丁度予定も入ってなくて暇でしたし」

私の不意打ちな返事に一瞬声を失った先輩だったけれども、すぐに笑顔になってそのままガッツと私に抱きついた。

「あ、あ、ありがとう！ ひいちゃん大好き！」

「ちよ、先輩苦しいって」

私の言葉など気にも留めず先輩は私をぎゅっと抱きしめる。顔には何やら柔らかいものが当たっている。うっ、羨ましい。

だけど、いくらお客さんがいないとは言え公然と抱擁されるのは何とも気恥かしい。まあ、そんな無邪気さが先輩の可愛いところなのだろうけど。

*

バイトを終え、一人とぼとぼと帰路につく。

気がつけば辺りはすっかり真っ暗になっていて、冷たい風が頬に当たる。

マフラーや手袋、コートを着けていても寒いものは寒い。どうしたって寒い、だって12月なんだもの。

「うっ、寒い。もうすっかり冬だね」

曇りがちの星空と腕時計を交互に眺めながらそんなことをぼそつと呟く。

まだ雪こそ降らないが凍てつくような風は無防備な頬に容赦なく襲いかかる。冬だから仕方が無いのだろうけど、今年の冬はいつも以上に寒い気がする。

「こんなに寒いのは冬のせい……なんだよね？」

私が虚空に放った問いには誰も答えない。ただため息にも似た吐息が白くなって夜闇の中をふらふらと漂っただけだ。

閑静な住宅街へと続く緩やかな上り坂はまるで音を失ったかのよ

うに静かだ。動くものと言えば坂を上る私とチカチカと点滅する壊れた街灯の明かりだけだ。私が足を止めればまるで辺りは時間が止まったかのように沈黙してしまう。

そんなひっそりとした坂の途中で私は振り返る。目に映ったのは無数の明かり。建物の明かりが真つ暗な夜の闇を彩る。そして繁華街の方はいつも以上にキラキラと輝いていた。

「クリスマスか……」

私の呟きは静かな空気を揺るがせたけれど、辺りはまたすぐに沈黙を取り戻した。

孤独に似た沈黙の中で頭に浮かんだのは先輩だった。

あの先輩にもついに彼氏が出来たのか。確かに美人で明るくて、そしてあの胸……あれで今まで彼氏の一人も出来なかったのがおかしい。

でも、なんだかなあ……羨ましいような寂しいようなそんな気分。「これで独り者は私だけになっちゃったなあ」

ああ、そうかこれが孤独というヤツね。

どうしてクリスマスは冬にあるのだろうか、こう寒くては独り者はますます孤独を感じてしまっじゃないか。

世間を照らす浮かれた装飾灯の明るさのせいで孤独な者はますます暗がりになり追いやられる。クリスマスデートだなんて羨ましくないんだからね、グスン。

「独りが嫌なら彼氏を作ればいいじゃない」と、かのマリー・アントワネット妃は言うかもしれないけど、私だって別に好きで独りなわけじゃないさ。

そりゃ恋人作りに積極的なわけじゃないけど、人並みに恋ぐらいはしたい。けどなあ……。

だけど、どうしても恋に積極的にはなれない。

自分に自信がないっていうのもあるのかもしれないけど、本当の

理由は多分違う。

心のどこかで私は、運命的な恋、みたいなものを求めてるんじゃないのかな。そんなことを考える。白馬の王子様とかそんなんじゃないけど、少女漫画みたいな恋をね私は待ってるのかもしれない。

「はあ、どこかに落ちてないのかなあ。胸をときめかせる恋ってのはさあ」

嘆きにも似た呟きに答えてくれる人はいない。

ええ、落ちてませんとも。そんなもの現実にはありませんから。

突然、何の前触れも無く訪れる出会い。実に受け身的な、ご都合主義なそんな運命としか言いようのない恋愛。実際にはそんな出会いなんて無いって頭じゃ分かってるんだけど、心のどこかじゃそれを本気で待ってる自分がいる。

心の奥底にいる自分はサンタを信じるキラキラした子供の目での運命の恋がやって来るのをただ、じっと待っている。

「ふう、馬鹿らしい。まるで子供だね、私は」

そう言っ私は遠くの繁華街の光に背を向けて再び坂を上り始めた。

無条件にプレゼントを持ってくるサンタなんていない、そんな言葉で無理矢理頭の中のごちゃごちゃを一掃して黙々と歩き続ける。

びゅうツと強い風が吹く。冷たい北風が頬に当たって痛い。痛いなあ。

厚いコートを着ているのに寒い。どんなに暖かくしてもどこか寒いまま。

だからキライ、冬は嫌い。

12月24日、バイトで忙しく働いてそのまま家に真っ直ぐ帰ってボタンキュー、のはずだった。

なのに、どうして私は今、繁華街の大きなクリスマスツリーを眺めているのだろうか。

理由は話せば長く……はならないか。まあ、事の発端はやっぱり先輩だった。

「もう、聞いてよ！ ひいちゃん！」

半泣きになりながら先輩はバイト先に顔を出してきた。あれ、今日はデートのはずじゃ？

そんなことを聞いてみると、どうやら彼氏さんに急用が入ったらしくデートはチャラ、ドタキャンでコンチクショウあの野郎。というところらしい。

「だからやっぱり今日は私がシフトに入るよ。迷惑掛けてごめんね、ひいちゃん」

「え、いいですって。私がやりますって」

いやいや、先輩、急にそんなこと言われても……。私だってクリスマスに予定が無いからバイト入ってんのに、今さら暇になっても困る。

しかし先輩もデート中止の怒りをバイトで忘れよう、という魂胆なのだろう。一步も引こうとはしない。

「いやいや、私が……」

「いえいえ、いいですって……」

そんな不毛なやり取りをしていると店長がやって来た。そこで先輩はすかさず店長に事情を説明する。先輩め、実力行使でシフトをもぎ取るうと言っのか。

だけど店長がそう簡単にシフトの変更を許可してくれるはずがな

いじゃない。

……そう思ってたのだけれど。

「そうだねえ、シフト変えた方がいいかもね」

店長はちよつと悩んだ後、涼しい顔でそんなことを言っただけだ。まさかの店長からの降板命令。

予想だにしない攻撃に、私は私は言葉を失った。

「ちょ、な、何ですか！」

「いや、だって柊さんは今週はほとんどシフトに入ってるからね。

それに体調悪いんじゃない？ 今日はやけに咳が多いけど」

う、確かに今日は朝からちょと風邪気味だけど、まさか店長に気付けられるなんて。ただの眼鏡を掛けた冴えない店長と思っただのに侮れないね。

「ま、だから今日は柊さんには休んでもらうよ。代打もいるようだし」

店長にそう言われ、私はバイト先を後にすることになった。

「お大事にね」と去り際に先輩は心配そうな顔で告げる。「大丈夫ですよ」と笑顔で返し私は出口のドアを開けた。

そのまま真つ直ぐ家に帰れば良かったのだ。家に帰ってそのままベッドに倒れ込んだらよかったのだ。

「あ、でも冷蔵庫の中何も無いや」

……そういうわけで私は繁華街の方へ足を向けることとなったのだ。まあ、ついでに風邪薬とかも買わなきゃいけないから丁度よかったんじゃない？

しかし、私は日の暮れた24日の繁華街というものを舐めきっていた。

そして、不覚にもしっぺ返しを喰らうことになるうとはこのときはまだ予想もしていなかった。

ら、ちら。

ふう、どうやら誰にも聞こえていなかったようだね。

だけど「聞こえていなかった」という表現が間違っていたことにはすぐに気が付いた。正しくは「誰も聞いていなかった」だろう。

見なさい、クリスマス前の聖なるカップルたちは皆各々が二人だけの世界に入り込んでいないか。

先程すれ違った手を繋ぎ合うカップルも、向こうの方にでキャハハと笑い合っているカップルも、そして右斜め後ろにいる今にもキスしそうな雰囲気のカップルも皆自分たちの世界にどっぷりと浸かって、周りのことなんか見えちゃいない。嗚呼、日本という国もすっかり墮ちたものですね。

そんな脳内お花畑なカップルたちの間を掻い潜りながら、私は家路を目指す。こんな所に長居は無用だ、さっさと家に帰ってご飯を食べて寝ちゃおう。

しかし、この凄い人混みの中を切り抜けるのは困難だ。さっきからドン、ドンツと人にぶつかりながら歩き続けている。

初めのうちはぶつかる度に「あ、すいません」などと謝っていたが、どうせ彼らは自分たちの世界の中で忙しく私の声なんて聞こえちゃいないのだからもうそのまま無言で突っ切っていくことに決めた。

肩がぶつかっても、ドンと強くぶつかっても文句を言う者はいない。それはそれで不気味だ。

その時、ズンと何か重いものが自分の体に押し掛かって来るような、そんな錯覚を覚えた。

その重いものは一体何なのか。私は胸がどうしようもなく締めつけられるのを感じながらそれが何であるかを考える。答えはすぐに出た。

今、私は世界から取り残されているのだ。

私の周りのは数えきれないほどの人がいるのに、それでも私は孤独。ぶつかつても誰も私に気付いてくれはしない。私のことなど誰も見てくれはしない。

スーパーの袋に長葱を突っ込んで独り寂しくカツカツと歩く私はこんな煌びやかなところにはいけないのだ。
ここに私の居場所は無い。

チクチク痛む胸の痛みを堪えながら私は下を向いて足早に歩いた。早くこの場から逃げてしまいたい。

足並みはどんどん速くなっていく。それはもう周りのカップルをダンと突き飛ばしてしまいそうなくらいの勢いだが、そんなことを気にしている余裕は無い。

どこか遠い、ここじゃ無いところに、行かなくちゃ。逃げなくちゃ。

だが、突然私の顔面に鈍い衝撃が走った。そして同時に「うおっ！！」という私では無い叫び声が聞こえた。

あちゃあ、どうやら本当に誰かに思いっきりぶつかってしまったようだ。

「あ、あの、すみません……っつて」

目を疑った。見るとそこにはサンタがいた。それも髭の外れかけたサンタクロースだ。

「さ、サンタ？」

「チツ。そうだよ、サンタさんだよ。前見て歩かないお嬢さんに思いっきり体当たりされたサンタさんだよ！」

目の前にいる、妙に若い自称サンタさん（住所不定）は舌打ちを

しながらギロツと私を睨んできた。

その手にはポケットティッシュが握られていて、背後の白い大きな袋からは同じポケットティッシュの山が見え隠れしている。

何だかよく分からないけれど、もしかしたら私はとんでもなく面倒くさそうな人にぶつかってしまったんじゃないだろうか。

「あ、あの、そ、それじゃ、失礼しましたー」

私はそう言っただけで適当に誤魔化し、面倒なことになる前にさっさとこの場を去ることに決めた。

「ちよつと、待ちな」

「はひっ！」

サンタの手が私の肩を思いっきり掴んで、私を引き止める。

何なの、一体。私を呼び止めてどうしようっていうのよ。はっ、もしや食べるとか。た、助けて、誰か！

熱がとうとう頭を侵し始めて、さらには予想外の出来事も重なって、私はどうしようもなく錯乱していた。

そんな混乱した私の目の前に、ずいと白い何かが現れた。

「ほら、忘れもんだよ」

サンタは長葱の入ったスーパーの袋を私の目の前に差し出し出した。

あ、そうか。さっきぶつかったときに落とされたのか。

「あ、ありがとうございます……って、ひゃっ！」

私がレジ袋を受け取ると、そのままサンタの顔が私の顔に急接近を始めた。短い悲鳴が喉からこぼれる。

か、顔が近い。す、すっごく近い。な、ななな何なのよ、一体。熱に浮かされて夢でも見てるんじゃないの。

どういつわけか頬がカアツと火照り始めるのを感じた。

「お前泣いてんのか？」

「はい？」

状況が全く理解できずにガチガチになっている私を他所に、サンタは手に持っていたポケットティッシュから紙を二、三枚取り出した。

そしてそれで私の目の周りを優しく拭う。

その時、初めて私は自分が涙を流していたことに気がついたのだ。いつから泣いてたんだろう。

もしかしたら、人混みの中を歩いている間中、ずっとポロポロ涙を流しっぱなしだったのかも。そう考えると無性に恥ずかしくなってきたよ。

私は火照った頬を両手で押さえて独り静かに悶絶し始めた。

「ま、何があつたか知らねえけど元氣出せや」

サンタはぶつきら棒にそう言いながら、ポケットからガサゴソと何かを取り出してそれを私の方に差し出した。

差し出された手の平には小さな可愛い雪だるまの人形が乗った真白い箱が置かれている。

「なんですか、これ？」

「プレゼントだよ。サンタはプレゼントを持ってるのが常識だろ？」

私の困惑した様子などどこ吹く風でサンタはさも当然のようにそんなことを言い放った。

「いや、そうじゃなくて。どうして、私に」

「お前が寂しそうな面してほけつと歩いてるから、この優しいサンタ様が励ましてやろうってな。そんだけさ」

そう言っつてサンタは真白い箱を私の手の中に無理矢理押し込んだ。「それな、うちの会社で作ってるオルゴールなんだぜ。ま、まだ試作品だけだな。あ、でも試作品でもなかなか良い出来なんだからな。感謝しろよ、うちの製品の利用者第一号になるんだぜ」

私は手の中の小さなオルゴールをじつと見つめていた。サンタは

荷物を片づけながらやっぱり一方的に話し続けている。

街のイルミネーションが雪だるまの人形を鮮やかに彩っていた。融けない雪だるまを私はじっと見つめる。

「じゃあな。ま、若いうちは色々あるからさ、そのうちいいことがあるさ」

サンタはティッシュの入った白い袋を抱えて私に別れを告げようとする。

その時、私の中でカチンツという音が響いた気がした。まるでずれていた歯車がはまったような、そんな音。

そして、思うよりも先に言葉が私の口を出た。

「ま、待って」

口からこぼれ落ちたその言葉は向こうへ歩き出したサンタの背中に当たる。

「何だよ。まさか、そのプレゼントが気に入らないとかいうんじゃない……」

「そ、そうじゃないわ。えーと、あ、あなたの名前教えてよ？」

正直、自分でもそんな言葉が口から出て来たのには驚いた。だけど、ここで何か言わないとダメなんだと。そんな気がした。

「名前？ さつきも言ったろ、サンタさんだよ」

「そうじゃなくて……」

私はにやけ顔で答えるサンタに少し苛立ちを感じた。だが、サンタは悪びれる様子も無く続ける。

「そもそも俺の名前なんて知ってどうなるよ？ どうせ二度と会うことなんて無いと思うぜ」

「ううん、あなたにはまた会える気がするの」

「ふうん。でもサンタには一年に一回しか会えないんだぜ。クリスマス夜の夜しかね」

「で、でもあなたは優しいサンタさんなんでしょ？ そんな寂しいことは言わないはずよ」

「それはだな……」

サンタは言葉を詰まらせた。流石の私も屁理屈が過ぎるとは思っけど、どうせ元々無謀な賭けなのだ。だから最後の最後にこの一言を呟く。

「それにあなた、髭無しだし。……サンタらしくないよ」
沈黙が続く。サンタは完全に口を閉ざしてしまった。

たぶん、この沈黙はごく僅かな時間でしかなかったのだろうけど、熱でボーっとしていた私にはその沈黙がとても長いものに感じられた。

だから意識を必死に保つように、私はサンタをじっと見つめていた。

そして、もう完全に熱でどうかなってしまいそうになったとき、サンタが沈黙を破った

「あー、分かったよ。教えるさ。名前ぐらい教えてやるさ」

その口振りは投げやりのようではあったけど、サンタ本人は少しも嫌がっている様子を見せてない。

「フキだ。サンタのフキ、これで充分だろ」

「サンタの、は余計なんじゃないの？」

「ふん、これ以上はまた今度会えたときにでも教えてやるよ。で、お前は？」

サンタこと、フキはちよつと不機嫌そうな顔で訊いてくる。ああ、そうか自分の名前はまだ教えてなかったや。

私はちよつとだけ考えてから、ニコリと微笑んて言った。

「ひいらぎ。これ以上は今度会ったときに教えるよ」

「は、お前も変わってんなあ」

「あなたも十分変わってると思うけど……」

「ははは、そりゃそうだろうな」

そんなことを言いながら私はサンタと、いやフキと別れた。

あの胸を締め付けるような痛みはいつの間にか消えていた。

*

私は家へと続く静かな上り坂を一人登っている。

熱は多少引いたようだけど、頬の火照りは収まらない。でもこれは熱のせいじゃないんだろうな。

見下ろす繁華街はまだキラキラと輝いているみたいだ。おそらく今夜は一晩中あんな感じなんだろう。

坂の中ほどまで上ったところで私は足を止め、思い出したようにポケットの中をゴソゴソと漁る。

ポケットから出て来たのは雪だるまの人形がついた可愛いオルゴールだ。

正直なところ、あのフキとかいう変なサンタ男にもう一度会えるっていう確証はない。だけど何だか会えそうな気がする。

運命の恋だとかは夢みたいなことだと思うけど、小さな奇跡ぐらいは信じてても良いんじゃないのかな。

そんなことを考えながら私はオルゴールの蓋を開く。

「わあ！」

蓋を開けると蓋の上の雪だるまがクルクルと踊り出し、綺麗な音色のクリスマスソングを奏で始めた。

あのサンタが「試作品だけど良い出来なんだからな」と言っていたのも納得できる。

可愛く、そして綺麗だ。クリスマスのイルミネーションとはまた違った幻想的な世界が私の手の上に広がる。

鈴の音にも似たオルゴールの幻想的な調べが、街の片隅で静かに

響く。

夜空に煌めく星の下、小さな雪だるまは軽快なステップでダンスを踊る。

そんなイヴの夜。

> i 1 5 7 0 8 | 1 2 7 0 <

(後書き)

タイトルに何か期待してしまった方、ご期待に添えずに申し訳ない。でもクリスマスだから、イヴだから許されるんじゃないか、とか考えている私は随分な野郎です。

何だかかなりご都合主義でグダグダ感があるかも知れませんが、ご指摘・感想などありましたら何か一言でも。

それでは、メリークリ〇〇ス。よいお年を。

【余談】

下はこの小説の予告絵だったんですが、これでは完全に嘘予告ですね。

反省はしてません。

> i 1 5 6 2 2 — 1 2 7 0 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6828p/>

ファッキン！クリ〇〇ス！

2011年2月25日01時25分発行